

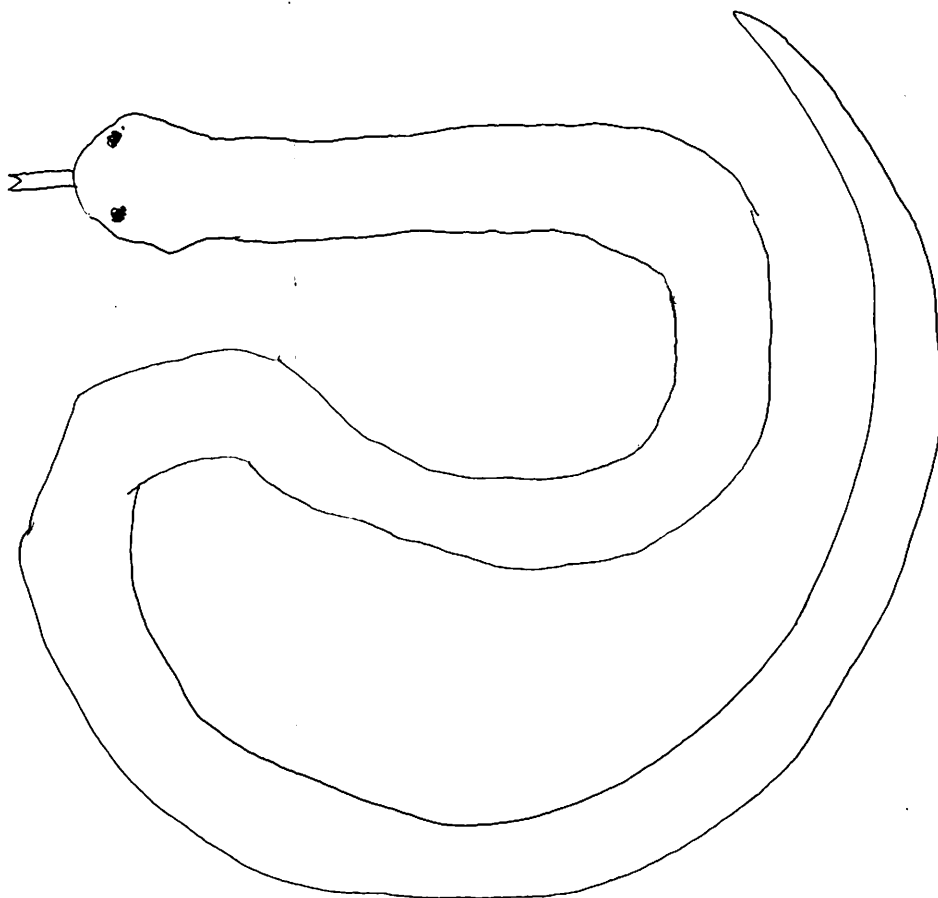
1977年12月3日 第三種郵便物認可(毎月18回1・2・3・5・6・7の日発行)
2025年1月14日発行 増刊 8592号 SSKP たこの木通信 447号

SSKP

たこの木通信

447号

(2025/1)



電話：042-389-1378

E-MAIL：takonoki@dream.jp

ホームページ：<https://takonoki.net/>

郵便振替：00100-2-24685

2025 年の初めに

「重度訪問介護対象拡大から 10 年何かイベントをやりませんか？」と呼びかけ、前号にて実行委員を募集しましたが、結果応募がなくて企画倒れと化しました。

とは言え、「知的障害のある人の自立生活を考える会 2024 年度オンラインシンポジウム」の第一部で「重度訪問介護の対象拡大から 10 年——これまでを振り返る」というテーマが取り上げられ、又重度訪問介護の対象拡大を巡っての本が出るとかでないとかで、皆さんの関心事なんだと感じています。

実行委員の応募がなかったのは、単にたこの木通信紙面上で呼びかけたのみで私に積極さがなかったためと反省しています。故に、引き続き声をかけていきたいと思っていますので、ぜひ関心のある方はご連絡ください。

さて、「2025 年の初めに」などと区切りをつけてあれこれ考えるという事はあまり発想はなく、「〇周年」という発想もない私なのですが(年度の区切りは求められるのでやむなくです)、間もなく 62 歳になる私にとってはあれこれ考えなければならぬことがたくさんあるように感じています。

重度訪問介護をめぐる話もそうですが、これまで取り組んできた自立生活支援をめぐる様々な事柄も広げた風呂敷をどうするかという課題が迫っているように感じています。なぜなら、年々先人たちが亡くなるという事態が増えてきて、遺されたものとして何を引き継ぐかをあれこれ考えるも、「次は私の番」というのはいずれやってくる現実。その後遺された人たちが何をどのように描くのだろうか？描けるように私は何をどうすれば良いのかという事をしばしば考えるようになりました。又、自立生活の可能性を語り、当事者自身の暮らしと支援を考える中で、親御さんとの距離感をあれこれ考えてきましたが、今や当事者が親もとで過ごしていた年月より自立生活の方が長くなり、支援を担い続けてきた「岩橋亡きあと」を考えると、親御さんたちに言ってきた事が丸々私にも当てはまっていくと思います。

就学時健康診断に始まる学校や子ども達の事。進学や就労と言った人生の選択。一生涯続く当事者自身の暮らしと支援。それらに關与する制度との向き合い方。重度訪問介護に限らず居宅介護や日中活動の事。お金の管理や使い方をめぐるやり取り。フィットする支援をめざす会にある T さんの出所後の暮らしや同様な状況にある当事者たちの事。

差別解消法にある合理的配慮の義務化をめぐり、「合理的配慮」ではなく「合理的調整」とした場合、その「調整」は様々な場面において様々な形で「調整し続ける」という事であり、課題が広がりはすれどなくなりはいない。しかし、私にも終わりというものがある中で、何をどのようにすればよいのか？

新年を迎える事がめでたいのは、新しい年がめでたいというよりも、新しい年まで行き着いたという感をもって「めでたい」と思う私。

広げた風呂敷をどうするか？そんな課題を考える 2025 年の始まりです。

18 年分の答えあわせ

横田彰敏

障がい児は普通学級にいくのがいいか？

51 対 49 で YES

これが私のたこの木クラブ 18 年間やって今の時点での答えです。

なんかふざけて書いてるみたいみたいに思われるかもしれませんが、現時点での私のかなり誠実な答えです。

こんな問いを自らに課し誠実に考え答えるしかないきっかけとなったのは

1 月 12 日(日)に千葉市きぼーる 15 階 活動室で行われた『年初め勉強会 35 年分の就学相談会の答え合わせ(千葉市)～「ふつう学級」と「自立生活」をつなぐもの～』という、講師が佐藤陽一さんで、チラシの内容によると長年、千葉県で「普通学級入学のための就学相談会」の講師をしてきた体験を元に、子どもたちのその後の人生にどう繋がったかを当事者親子と一緒に答え合わせをします。

という勉強会に行ったことによります。

家から千葉駅までおもっていたより時間がかかり 30 分ほど遅刻して 14 時ごろ会場に着いたのですがすでに超満員といった感じで、後で聞いたところ 60 人定員のところ北海道から沖縄まで全国から 70 人の人が来ていました。

障がい児は普通学級にいくのがいいか？75～96%普通学級がいいという空気がその会場には流れていたと思います。96% までいってましたからね。ある意味圧倒的です。1980 年代の自己啓発セミナーみたいな空気もちよとなつかさとともにすごく感じてしまったのだけど、なぜかそれをけなしたくなるのではなく、むしろオレ的には褒めことばというか、、、このご時世において大谷翔平あのさわやかさはなんなんだろう的な、、、自分でもますます何言っているのかわからなくなってきましたが、

私は何が言いたいのかというと 96%という圧倒的な空気のなかでさえ私自身のまれそうになりながらも 51%にあえて踏みとどまったということです。

1 月 14 日(火)に『年初め勉強会 35 年分の就学相談会の答え合わせ(千葉市)～「ふつう学級」と「自立生活」をつなぐもの～』に参加された佐藤陽一さん他 2 名の方(沖縄と八王子の人)がたこの木クラブを訪ねてくださり岩橋さんと私計 5 人で近く中華料理屋で 23 時くらいまで餃子たべたり、ホッピー飲んだり、話をしました。

ちなみに今日は 1 月 15 日そして明日はたこの木通信発行日。マジで翻弄されまくりキャパオーバーなわけですがそんな中でやはり私の答えは 51 対 49 にするべきだと思うのです。会議の議論の場において優れた司会者はとにかく 51 対 49 へともっていくというのをネットで読んだことがあります。別に 49 対 51 でもいいと思います。すみません。自分でも何言っているかわからないけどキャパオーバー中でしかも時間がないのでこのまま続けます。「中立とは弱者の立場に立つこと」これはだいぶ前 Twitter でたしか精神科医の人が言ってたのな？なかなかの名言ですね。で、昨日中華料理屋で話して考えさせられたのは 51 のこの 1、この 1 に何かその人の個人の譲れないもの、こだわりみたいなのが出てくる。その人特有の個性なのかこだわりなのか譲れないものなのか。そしてその 1 は尊重するしかないもの、尊重するしかしょうがないものなのかもしれません。支離滅裂ですがキャパオーバーなのでこのまま続けます。たとえ自分自身は 70 対 30 だと確信していてもそれをあえて 51 対 49 へと持っていくべきです。そうすると逆に 30 対 70 にされてしまうリスクがともないますがそれはいずれ経験知によって回避されるでしょう。70 対 30 の確信をあえて 51 対 49 へ持っていくにはどうすればいいか。それは 30 側の言い分に対して肯定的に耳を傾けてその言い分のポテンシャルを最大限に想像することです。中立とは弱者の立場に立つことです。支離滅裂ですません。また来月よろしくです。

じゃすみん通信 ～第89回 「存在している」こと の巻～

大野沙彩(じゃすみん)

2024年はあっという間に過ぎ去り、2025年になったかと思えば、1月ももう半分終わり。時間を無駄にしていけないなあと思いつつ、無駄な時間を過ごしている自分もいる。そんな年初め。年明け早々生理になり、風邪を引き、いきなり本厄の本領を発揮しているようですが、今年は年女なので、なんだか今年も良い年になる予感がします。ポジティブに行きましょう。

さて今回は、「そこに存在しているということ」の大事さと言いますか、そんなことを書きたいと思っています。最終的にどこに行き着くのかはわからないまま書き進めています…。

えるぶのボランティアさんで、仲良くしてた人がいるんですが、その方は数年前に亡くなりました。くだらないLINEをしたり、一緒に韓国料理を食べに行ったり、病気のことを聞いたり、私の話を聞いてくれたり。えるぶのボラもだいぶ前には来なくなっていたので、来なくなってからほぼ会っていなかったんですけどね。今でも時々寂しくなります。「もう一生会えないんだな」と思って涙がでます。悲しいとかそういう言語化できる感情ではなく、ただ涙が出るんですよね。でも、その方のこと、笑顔で話せます。あんなことあったよね、こんなことあったねと。なんというか、亡くなる前から「会っていなかった」ので、亡くなってもその「会っていない」の延長と捉えることもできると思うんです。でも、でもですよ、当然だけど、こんなこと当たり前なんだけど、今後会おうと思えば会えることと今後一切会えないことって、雲泥の差。全然違う。会いたい想いを持ってても、その想いが叶うか叶わないかで、全然違う。今自分の目の前にいなくても、この地球のどこかに「存在している」という事実って大事だなあと、彼女のことを思い出すたびにそんなことを思うんです。

ただそこに「存在している」ということがいかに大事かを考えさせられます。えるぶも今ある課題解決に向かって色々努力すべきだとは思いますが、でも一旦ここではそれは置いておきますね。テーマから外れちゃうので。今ある課題解決はとりあえず置いてでも大事なことと思うんです、えるぶが「存在している」ということが。えるぶはそこにあって、いつでも連絡できる、ふらっと足を運ぶことができる。そこには昔からの馴染みのスタッフがいて、他愛もない話をしてまた帰る。次に来るのはまた10年後かもしれないし、それをきっかけに毎週来るようになるのかもしれない。月に一回かもしれないし、2度と来ないのかもしれない。そこは今はどうでも良いのだけれど、ここに変わらず「存在している」ことで、10年ぶりのメンバーも顔を出してくれる。とても大事なことだよなあと思うので。今ある課題を先送りにして、ただそこに「存在」してれば良いということ言いたいわけではないんですけど、結構今の課題に気持ち持っていけるとただここに「存在してる」ことの大事さを忘れがちになるよなあなんてふと思ひまして。結構熱く語ってしまいました。

亡くなった方の分まで頑張って生きなきゃなんてこれっぽっちも思わないのですが、その方のことを忘れず大事に心にしまって、私は私で今ここに「存在」していようと思います。私のことを好いてくれたり、大事に思ってくれている人にとって、私が今ここに「存在していること」が遠くからでも力になりますように。みなさま今年もよろしくお願いします！

行ったり来たりして考えていることなど12

井上武史

夢中になってあちこち動き回って活動して来て、われながら多動だなと思いつつも動くのをやめられないここ何年をも過ごして来ました。が、あ、ここが一区切りだったんだ、そう終わって初めて気づいて、部屋をわりと丁寧に片づけて、もしかしたら人生で最もゆったりしたと言ってもいいくらいの正月を今年は過ごしていたのです。

そうした生活がいつから始めたのかは自分ではもちろんよくわかっていません。それは、2019年の11月でした。コスタリカのプロジェクトで2016年に成立させた「自立法」がようやくこのときに実際に運用されて、ぼくたちが活動していたペレスセレドンでも政府の給付による介助派遣サービスが開始されたのです。INAと呼ばれる国立の職業研修機関で研修を受け、日本の介護福祉士のような資格を持った介助者の人たちがこの日から、市内の障害者宅に行って、重度訪問介護と同じように障害者の身の回りのことであれば区別なく何でもやれるようになっている制度ではたらき始めたのです。

アレハンドラという女性がいて、ぼくが働いていた自立生活センターの事務所からほんのすぐそばに住んでいるのですが、それでもちょっと事務所に行こうと思えば、お姉さん、お母さんなど家族の付き添いを頼まなくてはいけなかった。ぼくが年が明けて初めてこの目でこの制度が始まったのを見たとき、ぼくらがよく知っている障害者が介助者を連れてくる独特の雰囲気がそこにあって、その中にアレハンドラもいて嬉しそうに顔を上げて笑っていたのです。

自分たちがこのプロジェクトをつうじて成し遂げたものであるのですが、それでもちょっとすごいことが起こっているなと思い、そしてこれをここだけでとどめてはいけないうらう、そう思ったのです。このときからぼくの多動な活動は始まったのです。そのもう一月か二月後にはコロナ禍が世界を襲い、ぼくもぎりぎりのタイミングで帰国して、一瞬しばらく何の活動もできなくなるなと思ったのですが、ものごととは何がどう転ぶかわからないもので、むしろこれからぼくらにすべてが追い風になってくれたのです。

2020年5月、この頃からちらほら Webinar が開催されるのを見かけるようになるのを見て、ぼくらはホンジュラス、グアテマラ、コロンビア、ペルー、アルゼンチン、ボリビアなどやり取りのあるラテンアメリカで自立生活運動をつづけている仲間に声をかけて試しに会議をしてみたらこれが異常な盛り上がりを見せ、翌月からそのまま「ラテンアメリカ自立生活ネットワーク RELAVIN」として活動を始めました。コロナ禍にはぼくらは半年に一回のペースで Webinar をやり、それぞれとてもインパクトのあるものでした。

ラテンアメリカではコロナ禍に生まれたもう一つ注目すべき障害者運動があり、メキシコで発祥しその名も Movimiento de personas con discapacidad 「障害者運動」と言います。一昨年から RELAVIN と連携してこれを世界大の運動にしようとしているところです。

コロナ禍後のラテンアメリカの動きで、もう一つ特筆すべきなのは、日本の介護保険にあたるようなケアのサービスがラテンアメリカで一斉に始まろうとしています。ラテンアメリカでは、近年女性運動がとても活発で激しい運動も盛んに行われています。もともと主に女性が担う家事や育児などの労働を社会で担うようにしなければ男女の平等はないと言われづづけ、計画にはあったものがコロナ禍によって加速した面がありました。この制度は「統合ケアシステム」と呼ばれ、そこには高齢者の他に子供や障害者も含まれたサービスになるはずなのですが、障害者団体には何の相談もない状態です。危機感を持ったラテンアメリカの活動家たちが集まって文書を作り、各所でロビーをしたところ、ILO 国際労働機関が自立生活センターのケアのサービスを仲介する日本の仕組みに関心を示してくれ、年末ぎりぎりまでかかってラテンアメリカの自立生活センターの報告書をまとめて提出したところでした。

5年かかったけれど土台は整いました。今年はこの報告書を各所で広め ILO といっしょにラテンアメリカに自立生活センターを広げていく仕事にかかります。

社会へ向けてその10 立野 陽太
十二月三十日に高校の同級生5人と大泉学園駅
の近くにある「カラオケまねまね」に行きました。
ドリンク飲み放題のコースで、時間は
17時から19時まででした。私が歌った
のは秦基博さんの「ひまわりの約束」、B'zの
「イルミネーション」、A1さんの「アルデバラン」など
です。そのあと、高校の友達の家で
「金周パーティー」をしました。皆で「ライブ」
というスーパーで「金周の材料とお酒」を
買い出ししました。私が買ったお酒は
「キリン氷結35、コロナエキストラ330并瓦」
です。友達の家では「北海道の大学に
通っている友達」、「練馬に住んでいる友達」2人も
ZOOMで繋ぎました。埼玉に住んでいる私の
同級生の友達が最近、結婚したことを発表し、
皆びっくりしました。高校を卒業してから毎年、
金周パ忘年会をやっています。

浜島恭子

子どものころ、家族で出かけて、本屋で
(1978年度の)全国読書感想文コンクールの
課題図書三冊を全部買い与えられた(仰天し
た)記憶がある。

○浜野卓也『やまんばおゆき』金の星社

○斎藤隆介『天の赤馬』岩崎書店

○吉田比砂子『目がみえなくても』講談社

最後の作品は、点字の発展に尽力した自身も
盲人のルイ・ブライユの伝記で、記憶に残ってい
る。最初の『やまんばおゆき』は、姥捨て伝説の
物語であるだけでなく、親族里親(キンシップ養
育)の話でもあったと今気づく。

何も書けないので、昔ネタでお茶を濁します。

チャイルド・ケアのアルバイトを始めた:

1回だいたい3時間半ほど、チャイルドマイ
ンダーは2人。子どもの数はそのときによって違う
(2人の時もあれば6人の時も)。子どもたちが
お腹がすかないように、サンドイッチと果物、ジュ
ースを持ちこむ。だいたい1歳半~学齢期前の
子どもが来る。

プレイセンターの中は、たくさんおもちゃがあっ
て好きに遊んでよいのだが、人が遊んでいると
それで遊びたくなるものらしく、必ず取り合いが
始まる。3歳前くらいだと交渉技術が「相手を手
で押しのける」か「抗議の声を張り上げる」くら
いしかない模様。たいがい小さい方が攻撃的な
ので、大きい方が仕方なく譲られるようだ。

一度、年齢がほぼ同じくらい(2歳前)の男
の子と女の子が何度も衝突した。やや小さい女
児の方が、おもちゃはすべて自分のものだとい
う確信に満ちていて(姉がいて、いつも譲ってら
れている模様)、常に勝ち、負けた男児は毎回マ

インダーの元に慰めてもらいに駆けつけていた。

次にその男児が来たときは、その子がグルー
プで一番小さかったためか、今回はおもちゃは自
分のものだという確信があった模様で、常に他
の子どもを押しつけ勝っていた。

子どもたちは毎回顔ぶれが少しずつ違い、最
初はいつも、一緒には遊ばない。おもちゃの取り
合いだけが唯一の交流に見える。1~2時間くら
い経つと、小さい方が大きい方の真似というか
邪魔をするという感じに一緒に遊び始めるのだ
が、毎回楽しい。

原谷学童保育所(京都)の谷口研二所長の
話を聴く機会があった:

学童保育(学童)と放課後等デイサービス
(放デイ)が併設され、子どもたちは一緒に過
せる。スタッフ数が切り詰められていた学童に
比べ、放デイはスタッフ数が多く、子どもたちが「見
て、見てー」と個別対応を求めるようになった。し
かし2,3ヶ月経つと落ち着き、いずれ応えてもら
えることに安心したのか集団で過ごせるようにな
った—という話だった。

集合的か、個人的か。政治的なことは集合的
にしか解決できなさそうなのに、人びとが求めて
いるのは個人的な対応に見える。

欧米諸国の一部で進む社会ケアの個人予算
化施策傾向は、個人を解放するものなのか、制
約するものなのか。集団の中で個人的な要求が
満たされたり、満たされなかったり、衝突しなが
ら付き合い方を学んでいく。スタッフがそれを見
守る。

(はましきょうこ 雑誌家ときどき支援員)



荒井聡子

ピピピピ ピピピ

チチチチ

カァカァ

光が 射して

鳥たち 呼びかわし

歌っている

外は 地面に 粉をまぶしたよう

テラテラ 反射して

足音は サクサク いう

私の 自転車。サドルの表面が、うすら氷、てる

前輪の近くに 今年も ロゼット

去年ここで 冬を越したのと同じ

クサノオウ。

黄色の花が 咲く

種は 甘くて 虫が 土の中に 運んでくれる

ひっそりと じっとして いるものたちにも

力が 湧いてくる。

朝は みんな あついなのか

20.

私は 車を運転しない。街をいつも 歩道が
車道の 端から 見ている。たまに 車に乗せてもらうと
視野が 広く 感じる。車は まん中。歩くと 自転車は
いつも 隅に 追いやられている。

ガードレールから 歩道の 車道側にある。車から ちがって
乗りあげようとしても 防いでくれない。一見 歩くと 人
守っているように 見える。車に乗る人から 安心して 運転
するために いるものかもしれない。車社会を 円滑にする
壁でもある。

工事現場から 鋼板に 囲まれようにならなければ。
いつごろから だろう。傾斜を 通る人の 安全のため？ 中か
見えない。存在感を 消して 意識を 向けさせない
ように しているの だろうか。知らないうちに。なんか
辛く できてくる。まよ。何たつたんたつ？ 街の
どこかで 工事してる。



野宿している人から 公権力に 追いつかれる時。まず
最初。すごい人数で 追いつ寄せ。瞬く間に 3mの
鋼板を 並べ立てて はりめぐらせ。包囲する。たか
か 薄い板。つるつるして 登れない。圧迫的な
壁。鋼板屋は。大繁盛 だろう。大嫌いだ。

私は。車から 来て ないのと 確かめると。ガードレールを
またいで みちを 渡る。できれば 壁も 乗り越えたい。
い。身軽に。何まになっても。

丘で できている 多摩川は。斜面の 雑木林の上に
公園が ある場所。よく ぶつかる。上に 行く 階段
や スロープが あるけれど。そこまで 上るより。斜面
を ガサガサ 登りたいと思う。そうやって。公園
を つき。り。の。さ。に。た。り。着。く。の。か
き。き。き。頭。に。虫。蜘蛛。の。巣。つ。つ。つ。

年末、理乃さん、咳と痰がひどく、息が苦しくて、とても
つらそうだった。火曜日に入院して金曜日に退院、今は
よくなってきている。「越冬」ほんとうに、冬は、一歩
一歩登るんだ。理乃さんの穏やかな呼吸を聴く
とき、世界が安らぎに包まれてい音、リズムのように
感じられ、ずっと続きますように、と祈らずにいられない。
でも咳と痰が、砂嵐のようにおそってくる。聡子さんが
「理乃さん、大丈夫？」と声かける。私は、理乃さんの
胸の中をボゴボゴと上がってくる痰を、今だ！と、
獲物を捕えるように、吸引器で吸いとる。



理乃さんが入院した期間、日中は、病院に行き、
介助者が理乃さんに付き添った。夜は、理乃さん
には申し訳なかったから、りのさとの聡子さんと、
ひとりにすることはできないので、りのさとに泊まった。
しかし、これまでの市との話では、聡子さんの泊まり
介助は、みとめられておらず、市に介助料を請求
することはできない。私は、年明け一番に市に
電話した。やはり、「聡子さんに支給している居宅介
護では、見守りはできない。」という。「では、見守り
のできる重度訪問を支給してほしい。」と言った。
市は「聡子さんは、その対象には含まれない。」と。
「はい、だから相談したいのです。」市「不承」は、
医師の診断を受けて訪問看護サービスを受けて
はどうかとアドバイスしている。」医療モデル
であり、福祉の医療化だ。制度に人も合わせさ
せている。すべてを仕事をまかえている。とにかく
まずは一度、りのさとに来てふたりに会ってほしい。
※「不承」というのは、聡子さんは、ひとりで何かを
できないから、ひとりでいられないのではなく、ひと
りでいること自体が、「不承」でできない。
おカネは、出すのも受けるのも、表現だ。応援
の、感謝の、連帯の、共にあうといっていることの、
そして何より、公正を保証する意志の表明だ。
力の強いものたちは、いつも、人をだまし、ハメるワナ
に使っているけれど、そうじゃない、使い方をしてみろ。



夕暮れ、電車の窓の外、M病院の建物が見えた。
久しぶりのこちに来た。つれあいか、何度が
入院して、毎日のように通ったけど、窓の外に
とまっている。あのひととつとつに、それぞれが物語
がある。耐えがたさ、やりきれなさ、やりすごすユーモア。
回復、祈り。私には想像がおよばない世界が。
私も、あの窓のひとつから、大きな木々、外を走る電
車、公園で遊ぶ子どもたち、とおくの煙突、それに
月だって、見た。

理乃さんが入院していた部屋から
電車が見えた。退院の日、荷物を
かかえ、「忘れ物ないかな」と病室
を後にする。晴れやかな気分
で、思わず、「理乃さん、よかったね。」
と言った。その目の前を、緊迫
した様子で、数人の医師と看護師
が隣の部屋に駆け込んで
いった。廊下には、ご家族だろ
うか。3人のかたが、心配そうに、ほと
んどワナワナしながら立ちあがった。
おひとりは涙をぬぐってあがった。
理乃さん、私も、とても心配を欠いて
いた…。申し訳ない。



今日、りのさとの冷蔵庫の中に、芋ようかん
があった。聡子さんが「丁さん(介助者)
と理乃さんと3人で作った。」と教えて
くれた。え？理乃さんも？一緒に
芋をつぶしたのかな？なんて思っていた。
理乃さんも3人で作った！聡子さんは、
さつま芋が大好きだ。理乃さんは、今、口
からは、食べられないけれど、料理でき
る！3人で作った芋ようかん！丁さん
とと理乃さんの腕を支えて、作業する姿が
目にうかんだ。理乃さんは、どんな感謝、
手ごたえ、に、かいていていただろう。
聡子さんも、理乃さんのそんな姿を見
るの、うれしかっただろうな。私は、いつも、
理乃さんと介護を受ける人にしてしま
っていた。もっとアイデア次第で、豊かな、
時間を生み出せるんだと、気付かされる。
よかった！

介助をやっていると、人と人は、たかさんの側
面と相手により作りながら、それぞれがそれ
ぞれの全部ではなく一部にすぎず、そうやって
なんか、影響を及ぼし合って、ふしぎに、
やっていく、複雑で、想定外な有機的
なものかたのせいと思う。私はたかさんの
介助者のなかのひとり。すべてではない
から、私は私のこんな感じでも、まあ、良
くも悪くも、やっていくしかない。それを
否定したら、それは自分に對するイザミ
ズムかもしれない。
これだけコピー、複製にあふれ、代わりは
いくらでもあるから使い捨て、の世の中で、
唯一無二のものもある。

「青年時代 3」68

僕にとって読書習慣は想像力、思考、内省、知識として役立った。特に、想像力が身についたと思える。しかし、想像力は僕を後悔ばかりする弱々しい自己を作り上げた。就職に関する事で、周囲の眼が気になり、まともな就職先さえ見つからず派遣やアルバイトでどうにか生活するしかなくなった。これが読書によって得たものだった。精神的に軟弱になったというか、過剰反応してしまう自分が居て後悔ばかりするようになった。先に思考が来るのではなく後から思考してしまう様になった。

それが現在まで続いてしまうのである。行動ありきで、考えが後になってしまう。だから誤解や蔑みを受ける様になり自信もなくなってしまうのである。しかし、この当時はいつか考えありき。に変わると思っていた。

これは仕事だけでなく生活にも反映していくのだった。

もし、生まれ変わりうるなら、考えて行動するような自分であってほしいと切に望む。

鷹野 洋(がんの ひろし) CVV の当事者スタッフ、元介助者

CVV(Children's Views and Voices)とは、子どもの視点と声を大事にしながら、養護施設などで育った経験のある人たちをエンパワメントすることを目的に活動している団体です

『社会的養護の当事者支援ガイドブック

CVV の相談支援』

Children's Views & Voices+長瀬正子著

頒価：900 円

問い合わせ

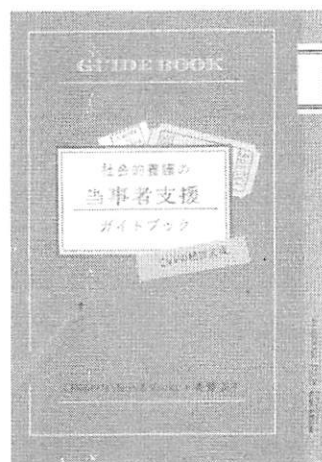
大阪市北区西天満 4-1-4 第三大阪弁護士ビル

503 号 葛城・森本法律事務所内

CVV 事務局

Tel : 06-6130-2930 fax : 06-6365-1213

MAIL : yes_cvv@yahoo.co.jp



凸凹ジグザグの道

～社会的養護で育つ子どもたちの暮らしの場所から～

長瀬 翼

年が明けて2025年になりましたね。みなさんは、年末年始をどのように過ごしていましたか？

僕の場合は、介助者をやっている頃から変わらず、カレンダーの休日とは無関係なシフト制の働き方をしているので、いつも通りに働いているうちに、数字だけがいつの間にか変わっていたという感じです。曜日感覚もなくなるくらいですから、残っているのは熱さや寒さなど、気候の変化を感じる季節感くらいでしょうか。

けれど、子どもたちにとってのこの時期は、クリスマスやお正月のお年玉など一大イベントが立て続けにあるので、欲しいものが次から次へと湧き出てくるようです。冬休みの宿題という望んでいないプレゼントを除けば、学校からも解放されているので普段よりも伸び伸びと過ごしている姿が見られます。

「あー、オレ学校行きたいけど、今やってないな～」と小学生が笑いながら冗談を言えるぐらいの余裕があります。実際に冬休みが終わって学校が始まれば、平日の朝に起きるのが至難の技という事態に直面するのですが。

いまの日本は少子化で子どもの数が減っているのにも関わらず、学校に行かない子どもたちは増加の一途をたどっています。そして、社会的養護で暮らす子どもたちは、それにもまして学校に行かなくなる子どもたちが続出しています。僕と同じくらいの世代で、児童養護施設で暮らしていた友人たちから聞いた話によると、昔は学校に行かないことがあり得ない事態だったから休むことなんてそもそもできなかったと言っていましたけれども。

いま僕は他の施設で働いている人たちと定期的に会議で集まる機会があります。その中で、不登校の対応、日中の過ごし方、ゲームやSNSとの付き合い方等をどのように考えれば良いか悩んでいるという話をよく聞きます。家庭でも親が悩むことと重なりますが、施設は様々な背景を持つ子どもたちが集団で暮らしているので、人手の問題も含めて一筋縄ではいかない難しさを感じています。

とはいえ、この辺りのことについては課題が山積しているし、何とかしたほうが良いことはあるのは間違いないけれど、実は僕はあまり深刻には捉えていません。きっとその答えは子どもたちと一緒に探していくことになるのだろうと思っています。

たこの木インフォメーション

たこの木クラブ公式ホームページの URL は、<http://takonoki.net/> です。

お詫びと訂正

前号で餅つき大会の日程を間違えてお伝えしてしまいました。予定されていた方には大変ご迷惑をおかけしました。

正しくは、2月16日(日)10時からです。

改めてご参加のほどよろしくお願い致します。

★引続き重度訪問介護対象拡大を巡るイベント実行委員募集中！

・前号でお知らせした実行委員募集。引き続き募集しています。関心のある方は是非ご連絡ください

・実行委員応募方法：メールにて応募（宛先：takonoki@dream.jp）

件名：「重訪拡大実行委員応募」

内容：氏名・住所・電話番号・所属とか立場とか・
（重度訪問介護に対する想い←任意）

◎詳細は、たこの木クラブ岩橋までお問い合わせください。

◆会員募集募集中！

2025 年度会員登録をお願いします！

たこの木会員 ￥6,000/年 賛助会員一口 ￥3,000/年

通信購読会員 ￥1,200/年 目標額 120 万!!

※年末カンパもどうぞよろしくお願い致します

郵便振替 00100-2-24685 たこの木クラブ

銀行振込 三井住友銀行 永山支店 普通 6424332

※銀行振り込みをご利用の方は、メール等でご一報いただけると
ありがたいです

※譲ってください

書き損じのはがき・年賀状

事務用品(ノリ・セロテープ:ハサミ等)

※大量のクリアファイルを頂きました。

ご入用の方にお譲りします！

●たこの木通信PDF版お届け中:

通信のページ数並びに発行部数が増え続ける中、
よろしければPDF版で受け取り可能な方は
お申し出ください。

たこの木ひろばの TV が壊れてしまいました。どなたか無償でお譲りいただける方がいましたらご連絡ください。近くであれば取りに伺います！！

※YouTube たこの木チャンネル開設中！

※詳細は、たこの木ブログでご確認ください(<http://takonoki1987.seesaa.net/>)

急募！！たこの木通信発行作業を手伝ってください！！

ここ最近、人手が集まった方たちの負担が増えています。毎月出なくても、少しの時間でも結構です。たこの木通信の発行作業を手伝ってください！！

日時：毎月第 3 木曜日 10 時半頃～最大 17 時(作業が終わるまで)

場所：多摩市関戸公民館(作業する部屋は毎月変わります。通信でご確認を)

2025 年 1 月は、第 1 学習室です

たこの木通信ご投稿お待ちしております！

※B5版1枚単位でお願いします！！

※ご投稿の締切は第3木曜日発行作業日の前の月曜日必着です。

但し、ページ割の都合上、ご投稿される方は、発行月の前月末までにご連絡を！

※連載記事も歓迎！通信の感想や日々の出来事や想い・イラスト等なんでもOKです。

たこの木関連本販売中！

「良い支援？」「ズレてる支援！」「支援のてまえて～たこの木クラブと多摩の四十年」
「知的障害・自閉の人たちと『かわり』の社会学多摩とたこの木クラブを研究する～」
三井さよ

PDF 版たこの木通信 DVD(準備号～400 号) 頒価 3000 円

※たこの木ひろばで購入できます！

テレホンカード販売中：災害時、携帯よりも公衆電話の方がつながりやすい！500 度数＝400 円でお分けします。NTT の固定電話の通話料金の支払いにもご使用出来ます。

《定期の予定》

・毎週水曜日 13:00～18:30 すいいち企画 たこの木ひろばにて

・第3木曜日 10:30～17:00 たこの木通信発行作業日

＜その他の予定＞

・2月16日(日)10時～ 餅つき大会

場所：多摩市旧加藤家(アクセスについてはお問い合わせください)

・フィットする支援をめざす会 2月4日(火)19:30～ZOOM及びたこの木

【急募！！居宅介護崩壊！！介助事業所募集中】

・月～金曜日 8:00～9:30 と日曜日 11 時～20 時の居宅介護と移動支援を担ってくれる事業所を探しています。対応可能な居宅介護事業所がありましたらご連絡を

『食べものから学ぶ現代社会—私たちを動かす資本主義のカラクリ』

(「ほんの紹介」83 回目)

現在の資本主義が大きな矛盾を生み出しているということがわかりやすく書かれている。そして、この方向に向かうべきだという示唆もある。ひとり一人が生活するうえで気を付けなければならないことも書かれている。問題はどうすれば、メインストリームの資本主義を違う方向へ向けることができるのか、だと思う。次回作も含めた三部作になるとのことだったので、次回作も楽しみ。

(前作は『食べものから学ぶ世界史』)

最初に「おにぎり一つ」が世界の政治と経済に繋がっている実例が示され、平賀さんは以下のように書く。「このようにおにぎり 1 つから、みなさんは世界の政治と経済に繋がっているのです。その現代社会のカラクリを食べものから読み解こうとするのがこの本の目的です」(iv 頁)

そう、資本主義の歪んだ仕組みを、こんな風に食べものを例に、わかりやすく(高校生にもわかるように)解説する本を岩波ジュニア新書で出すことの意味は小さくないと思う。多くの人にこの歪んだ社会の仕組みについて知って欲しい。そして、それを知った人たちが、何か行動したいと思えるような枠組みを作ることが、社会運動に求められている。

状況はとても悲観的という以上に絶望的な感さもある。しかし、絶望してあきらめてしまったら、そこで喜ぶのは、この歪んだ社会を支配している、今のメインストリームで甘い汁を吸っている人たち。

こうあって欲しいという方向に変えることは確かに難しい。しかし希望がないわけではない。レベッカ・ソルニットはこんな風にいう。「希望とは非常時にあなたがドアを破るための斧であり、希望はあなたを戸外に引きず

り出す… 希望は行動を求める。希望がなければ行動はできない」

そう、地球にはすべての人がが飢えないだけの食料はあり、輸送のための車両などのシステムもある。しかし、それを飢えた人のために使うという政治的な意思がない。

SDGs を推進する企業が「この商品はグリーンだったり、エコだったりするので買ってください」という。しかし「商品を買う量を減らしてください」という企業はない。一番重要なのはリサイクルやリユースよりも、リデュース(減らすこと)なのに。と著者(18 頁)。こんなインチきな SDGs が大手を振っている現実のなかで、斎藤幸平さんは「SDGs はアヘンだ」といったのだと思う。

金融が【「潤滑油」というよりギャンブラー】になっているという金融化の問題を指摘するという 4 章の指摘はとても重要だと思った。肥大化しすぎた金融化を具体的にどう規制すべきか、金融をあるべき「潤滑油」レベルに引き戻すためにどうしたらいいか、「潤滑油」レベルの金融がどのような役割を果たすべきなのかが課題となる。

現代資本主義経済が求める「ちょっと賢い消費者」に留まっていたら、どんな技術が開発されてもどんな政府になっても明るい未来は望めない

どうすれば、人のいのちよりも「交換価値」が重視され、戦争や飢餓が絶えず、一部の金持ちだけがどんどん金をため込んでいく社会を変えていくことが出来るのか、そこに向けたロードマップをどのように作り、実現していくのか、そのような問いを、明確に浮かび上がらせてくれる本だった。

つるたまさひで(相談支援事業所ここん/知的障害のある人の自立生活を考える会/丸木美術館/他)

【たこの木日記】 『年末年始。9連休という非日常』

2025年1月1日は水曜日。という事で暦の関係上9連休という方もいたかと思えます。たこの木ひろばでの活動は、12月25日のすいいち企画「年末大掃除&望年会」が最後で、1月7日のスタッフ会議から。故に12連休というとてもない長期休みになると12月の頭に思ったのですが。実際は、役所が閉まるまでの間に片付けなければならない事は多々あって、介助もありそんな連休は夢のまた夢でした。

とは言え、年末年始に帰省する当事者たちもいて例年よりも休みが多かったように感じます。ただ、まとまった休みが取れるわけでもなく、私自身の帰省等で旅行に費やすことはできず。飛び石の休みと待機状態とで無計画な休日を過ごしていました。

そして無計画な休日故にあれこれ考えさせられたのは、「連休」という「非日常」を当事者たちはどう過ごしているかという事。無計画であっても私自身が過ごす休日。そのすべてにおいて人の手を必要とする重度知的当事者たちの暮らしはいかに？私のように自らが情報を求めていくことができない。情報がなければ選ぶことができない。限定されてはいるものの介助者から得た情報に対しどう判断するかを考える必要があるだろうし、誘われた先に何があるのか判らず不安になることもあるだろう。どのように使っても良い時間。いつもと違う暮らしの流れ。やりたい事を他者に伝え実現する事の難しさもあれば。やりたい気持ちとダラダラと過ごしたい気持ちの天秤等々もある。

それらすべてにおいて何らかの形で他人が関与する「自立生活」の場面。

年末年始の介助ノートの記録を見れば「マイペースで楽しく過ごしていました」とある。それはそれでその人の暮らし方や暮らしぶりだと受け止められます。しかし「マイペース」と言えば聞こえは良いが、「それしか知らないかも」と思うと何らかの提案や普段と違う何らかのやり取りが必要なのではないかと思います。だからと言って、「休日ぐらいいは何も縛られず過ごす」「普段求められることが多い当事者たちが、何も求められずに過ごせる時間」という大事に思います。どちらもありとは思いますが時間は巻戻らず、当の本人は何をどう思い描いているのか判らず、結果時だけは過ぎていったように思います。

例年に比べ、休みが多かった今回の年末年始。その状況での私の暮らしと当事者たちの暮らし同じと言えば同じでも、一つ一つの事に他人関与が欠かせない違いは大きいと思った時、何一つ答えを見いだせないけど、その一つ一つの事柄を巡る他者の関与をあれこれ考えていると、休日が休日でなくなってしまった年末年始の私でした。

死なないための家1

DIY天命反転住宅イン所沢

あ

たこの木の忘年会には、予定が空いてれば出るつもりでいた。すこし迷ったけど出なかった。一年前の年末に新型コロナにかかって、症状はそこまででもなかったけど半年ほどメンタルが弱っていた。病み上がりの忘年会で何かおかしい感じがして、そのまま年末年始に入ってダメになった。たまたま仕事が入らない年末年始で、ヒマすぎたのが良くなかった。それで今回、忘年会に不吉なものを感じて行けなかった。

そのころ、いつでも孤独死できるように「冷蔵機能付き棺桶」を自宅に設置する、と通信に書いた。コンビニのアイスの冷凍庫をリビングに置いて、危なくなったら這って行ってダイブするか。それは費用がすごいから、製氷機を普段使っていて非常時に氷に埋まる仕掛けをつくる。…という時期を脱して、物事を前向きに捉えられるまで回復してきた。孤独死も案外悪くないのではないかと。死にそうな時に「ちゃんと死ねる」のは、現時点で、意外と難しい。

病院は、一度1ヶ月入院した経験だけだが、「故障した機械」として修理工場のベルトコンベアを流れていく感じだった。着実に治癒していく安心感があり嫌ではなかった。でも、最期にあそこに居たくはない。毎日のように家族や友人が訪ねてきて、自分の名前や関係があることを補給して、ようやく「自分」が保たれる場所だ。ちょっと気を抜くと壊れた物体になる。経験や記憶は治療には要らなくて、血液型やバイタルデータで識別される。それは寂しい。どうすれば避けられるか？そこでアレです。死にそうなときに死ねばいい。世間的には孤独死と呼ばれて、忌避されている。名前がよくないと思う。最期まで自分の場所にいる、というだけのことなのに。

環境も変えたほうが良いと思って物件も探していた。最近、所沢の古い家を手に入れた。小さい頃から「自分で家を建てる」のが夢だった。どんどん夢はしぼんでいった。細かく法律があって、自由に建てるには山奥でもないし難しい。小屋なら建てられると聞いて調べ始めた頃には「情報」が増えすぎていた。DIYといってもプロに近い技術で作る人がたくさんいた。せっかくDIYなのにプロみたいにしたら面白くない、と僻む自分も嫌になる。要はDIYの基準が高くなって手が届かなくなった。しかし、メンタル不調のおかげで「基準」が変わった。最期は一人で、その「死に場所」はどうあるべきか？そんなDIYerは少ない。ひねくれた芸術家や建築家はやってそうだが、DIYが趣味という、元気があり余った人たちは考えないだろう。

ものの見方を変えると印象ががらっと変わることがある。そして、絶望的に見えたものがそうでもない気がする。昔そんな話を聞いた。そういう「家」を作った人がいた。その名も「天命を反転する住宅」が三鷹にある。そこに住めば、人は「死ななくなる」そう。その芸術家・荒川周作氏の思想と絡めて、考え、実際に家を作るプロジェクトをやってみよう。時々通信で報告する。たこの木関係ないのでは？いや、社会のふつうや当たり前を問い直し、何か作っていくことは一つの運動なのではないか。もう、壁や天井を壊して、格安の建材を譲ってもらいに仲介アプリ

で調べて、軽トラで奥多摩から茨城まで走り回っている。荒川さんに感化されて死への不安を克服しつつあるのか、趣味が楽しくて元気なのか慎重に切り分けないといけない(現時点では楽しいだけだと思う)。

20代のころ愛知県に住み始めた。同時期に岐阜県に変わった公園があると雑誌などで取り上げられていた。『養老天命反転地』という。「身体の可能性を引き出し、死という宿命を反転させるための場所」だという。雑誌では「子供連れの休日のお出かけ先」と紹介されていたが、字面は宗教施設だと思った(PL花火とか美術館とか、よくある)。ぜひ画像を検索してほしい。とても楽しい所だった。売店でパンフレットを買って、不思議な仕掛けの謎が解けると思ったら、もっと謎の荒川さんだけの専門用語だらけで何もわからなかった。

荒川さんの著作は英語で、パートナーのマドリンさんはフランス語も交えるので翻訳が大変らしい。ある本の最後で訳者の河本さんが嘆いていた。長文で。難解すぎるので荒川さんが訪日するたびに会って、直接話せば進むと思ったら難題を出されてさらに長引いた。「読者の便宜を図るために、原書にはない用語解説と解題を付した」には、ちょっと笑う。20年前は、これが芸術だとしたら、誰にも分からないことを言って困るのを見る悪趣味なものと感じた。いまだに芸術家のポエムみたいな文章が苦手なのは、この人がきっかけかもしれない。

今はちがって見えている。図書館で本を借りてAmazonプライムの記録映像を見たが、引き続き何もわからない。ただ、支離滅裂に見えるメッセージが最近の気分ぴったり合う。誰もが「宿命」とやらを否定し、立ち向かわなければいけない時がある。自分と、それを取り巻く隣人・社会・世界の価値観・優先順位は、一瞬揃うことがあっても必ずズレる。加齢による変化もそう。そのどうしようもない宿命を重荷に感じたら、諦めたり受け流してもいいし、立ち向かってもいい。厄年とか中年の危機という時期に重なるんだろうな。

とにかくすごい人だ。それだけ伝えて初回は終わろうと思う。記録映像『死なない子供、荒川修作』から荒川語録。講演会らしいのに、なぜかずっとケンカ腰なので「！」を加えました。

- 17世紀以降に幾何学ができてから全部分かれてしまった！美術館、大学病院、学校、あれは絶対良くないんだ！あれが錯綜したミッションにならないと！新しいインスティテューション(施設)を作らないと、一日も早く！
- お父さん、お母さん、おじいさん、ぜんぶ消えていくんだ！そして皆「消えていきたくない」って言うんだ！どうしてそちらに向かわないんだろう？僕のように、そちらに全力をあげないんだろう？それが達成されたときに、初めて自由が達成されたっていうんだ！
- 知ってるか？「俺は一万四千年生きたから、そのウィンドウから飛び降りる」って言ったら、みんながお祝いするんだ！それが自由の獲得っていうんだ！
- 全く冗談の世界に生きてるんだ！可哀そうに！うんこするだろ？あのうんこよりひどいんだ！うんこはものすごい臭いがしたりするだろ？あのぐらいのことやってみろ、君たち。まず、うんこみたいになるんだ早く！そうすれば、お前が何者であるかがわかる！

あしたや共働企画のページ

共同連全国大会 IN 大阪 報告 その2

昨年9月に開催された、第39回共同連全国大会 IN 大阪「切らへん 分けへん 共に働くってええやん！ 一人一人の『暮らし』と『働く』が金儲けのネタになっている！ どないしよう！？」
今回は第1と第2分科会の報告です。

■第1分科会

働く「大丈夫か 障害者が商品化される労働者ビジネス！」

今回の大会テーマでもある障害者が働く上で、現状はどのようなことになっているのかをさらにこの第一分科会で深掘りしました。

全国で様々な形になって蔓延している障害者の雇用ビジネス。障害者の労働が企業の雇用率に売買されている実態や受けられるべき支援や労働機会から遠ざけられている現実。それに対してどのように働く現場をつくっているかなどを四人の登壇者①大阪市障害者就業・生活支援所長 前野哲哉さん ②フリージャーナリスト 藤田和恵さん ③共同通信社・特別報道室編集委員 市川亨さん ④NPO法人全Aネットワーク副理事長 中崎ひとみさん、そして利用者の立場からお二人の報告を受け、障害者が働く上での現状について知る分科会となった。

一定規模の企業が障害者を雇用する義務を果たさず、代わりに就労継続支援事業A型の事業者が障害者を雇用させ、必要な雇用率を売買する。数字上のつじつまを合わせるための実態が横行している。就労支援事業に企業が多く参入してきているのは労働ビジネスとして成り立つから。例えば「農園型」ビジネス事業者。貸農園などを企業に提供し、働きたい障害者を集めて雇用を事実上代行するビジネスが広がっているのです。利用企業の大半は農業とは無関係で、お金を払って雇用率を買っているのが実態。働く、と言いつつ障害者が一か所に集められた農園の実態は大半が休憩時間で実働は実質3時間以下、農作物が市場に出ることはほとんどなく、本来あるべき障害者雇用・働くというあり方からは大きくかけ離

れています。そのような雇用率達成のための代行ビジネスが横行しているなどの報告でした。

福祉と労働が一緒になるという就労継続支援A型の制度がいまではいびつになっている現状の中で、支援者、マスコミ、当事者、行政がそれぞれの役割をきちんと果たしていくことが障害者にとってよりよい「働く」になっていくのではないか、がこの分科会のまとめでした。

が、今の社会の中で障害者のみならず誰もがここにたどり着くのは簡単ではない、と感じました。

(長尾すみ江)

■第2分科会

くらす「障害者が街に消えていく」

「障害者が街に消えていく」、この言葉は、民間下宿を全国に広めた池田太郎氏の表現です。障害者が街の中で働きくらす、そんなことが地域でできているのかどうか、当事者のニーズによって住まいの場が機能しているのか、ということが第2分科会のテーマでした。

地域の中で普通にくらす、施設の決められた制度と限られた人の中でくらすなくとも、地域に「合理的配慮をする」という環境が整っていれば、障害者が地域生活ができる。しかし、その環境が作られているのかということをグループホームを経営されている4人の方から事例を挙げての話を聞きました。一人で暮らすことは金銭的な問題、夜間介助のヘルパーがいない、頼れる人もいないなど生活面の困難が多くあり、ハードルの高さを感じました。

何をどう考えたらいいのか、「安全」「安心」「責任」など当事者を取りまく周りのアセスメントの問題もあるけれど、地域での信頼関係を作ることが必要不可欠なことで、それにはまだまだ沢山の課題があると思いました。

分科会に参加して、日常では知り得ない話を聞くことができました。そして、私の住む地域では障害者が街に消えていけているのかな、と考えさせられました。

(谷岡由佳)

フットする支援をめざす会

。 華 華 。

私は 雪国育ちで、厚い雪と 雪に 包まれた冬は、暖かく感じます。青空に強い風が吹き抜ける東京の冬は 寒いです。

Tさんの暮らす長野は、氷が 3 尺 3 寸 冷たいか。と思います。手足がいかじかんでませんか？

冬は、ホームレス状態のひとには 厳しい季節でしょう。この年末年始も、生き抜くための寄り集まりが 各所で 営まれました。大阪、釜ヶ崎も、みなさん、お餅つき、ライブなどを楽しんで年を越した のことです。12月1日には、大かかりな 強制執行が行われ、そこで暮らしていた人たちは、追い出され、持ちものを 奪われました。私たちは、フットする支援をめざす会の有志として、強制執行を申し立てた 大阪府、実施した 大阪地方裁判所、大阪府と連携し、協力した 大阪市、大阪労働局(厚生労働省)らに、次のような 抗議文を送りました。

抗議文

私たちは、ホームレス状態にあった人たちが 暴行し殺害した罪で、現在服役中のTさんを支援する「フットする支援をめざす会」有志です。12月1日早朝に行われた大阪地裁・大阪府・大阪労働局・大阪市による あいりん総合センター敷地内を生活拠点としていた方たちへの 強制排除と 生活道具の強制撤去に対し、強く抗議します。

私たちが支援しているTさんは、「自閉スペクトラム症」「知的障害者」と言われています。しかし、子どものころから、地域で あたりまえに、地域のひとと ともに暮らすことに、Tさんも人々もこだわって、実践してきました。そのTさんが、同じ地域に暮らすホームレス状態にあった人たちが暴行し殺害した事実は、私たちに 深く突き刺さっています。

長年の面会や手紙のやり取りを通じ私たちは、Tさんが 周囲から影響を受けて、そのために「ホームレスは地域から排除されてよい存在」という考えを抱くに至ったことを知りました。公的機関が、ホームレス状態にある人々を 強制的に排除し、それを 正当化してしまう《この社会そのもの》から 送られるメッセージにより、Tさんは自らの中に 差別や誤った考えを形成してしまいました。

そのように罪を犯してしまったTさんを支援する立場から、私たちは今回の、ホームレス状態にある人々への暴力を決して 見過ごすことはできません。あいりん総合センターは閉鎖された後も、住居を失った人、安心して休む場所を探している人、助けを求める人にとって 大切な場所でした。そこに身を置けなかった人々を、そこに居ては いけない者として 排除することを 私たちは 許しません。

今回の強制排除は 機動隊員や 職員、警備員も 500人以上 動員し、前もって 準備した 確信的・計画的な 犯行と言えるのではないのでしょうか？ このようなことが 公的機関によって 平然と行われれば、ホームレス状態の人に 暴力をふるい、追い出すことを 社会が 承認しているサインとして受けとれるのではないのでしょうか？ 今後ますます 路上生活者への 襲撃や差別が 強化されるのではないかと 懸念します。

「障害者」と呼ばれる人々には 長らく「家族」と「施設」に押し込められ、地域から排除されてきた 歴史があります。当事者による運動によって 施設から地域での生活が 可能になってきた現在においても、社会の差別・暴力は、さまざまな形で 地域生活に 影を落とします。それらを生き、そして 被害者であるTさんを支援する 私たちは、今回の 大阪地裁・大阪府・大阪労働局・大阪市による 強制排除に対し、強く抗議するとともに、差別・暴力的な行為を とりやめよう 求めます。

2024年12月9日 「フットする支援をめざす会」有志

「障害者」というラベルを貼られ 不利益を押しつけられる人も、ホームレス状態にある人も、刑務所の中で 自由を奪われている人も、大切な ひりひりとして、平等に ありたいです。抗議のあて先は、直接 実行したり 委託した 部署でしたから、問うべきものは、私とその一員である 社会にもあり、抗議するとは、自分に対する 決意表明のようだと思います。怒りをぶつけるだけに 終わらず、今後、どうするの？ 「バカじゃないの？ あんた?!」とTさんに言われないよう、ちゃんと 考えます。

鶴峰 まや子

【たこの木通信発行作業大ピンチ！！】

毎月多くの人たちの投稿記事を頂き、今月で447号となったたこの木通信。
毎月第3木曜日の朝から夕方にかけて多摩市関戸公民館や多摩ボランティア・市民活動支援センターの印刷機や部屋を借り作業しています。

この発行作業を手伝ってくれている方々は様々です。多摩ボラセン主催の「ボランティア入門講座」をきっかけとなった方。すいいち企画に参加している当事者たち。ガイヘルのお出かけ先として立ち寄り手伝ってくれる方。「切手を貼る」事が趣味の当事者が時折現れる。作業が終わった後に飲むビールが楽しみで手伝ってくれる方。数年ぶりに手伝いに来てくれる方。ただただおしゃべりがしたいという方も含め、毎月様々な人たちによってたこの木通信は無事に発行/発送することができています。

ところが、作業の中心メンバーが交通事故にあい現在入院中。一人暮らしをしている当事者のヘルパー事業所が撤退し介助に穴が開いたため、はてなのたねでカバーしなければならず、作業開始時間が遅れる等により、ここ数ヶ月郵便局が閉まってしまう17時に間に合うか否かのギリギリの作業になる状況が生じています。

(時に、発送を優先し、手渡し分の丁合が残ることも)

これまでは、作業当日に原稿が届く・突然のページ数の増減があってもそれなりに対処することはできていたのですが、とにもかくにも公民館が開く9時には作業を開始しなければ間に合わない為、発行作業3日前の月曜日「締め切り厳守！！」を連載中の皆さんに切なるお願いをし、間に合わなければ「休載」という事態にもつながっています。

そして、郵便局が閉まる時間ぎりぎりの作業になってしまう状況だと、のんびり各々のペースで作業するという余裕がなくなり、その後のお茶会の時間が取れず、どこか発送作業が苦行と化してしまっていて、手伝ってくれた方々に申し訳ない気持ちになります。

障害の有無にかかわらず様々な人の手によって作られるたこの木通信。印刷・紙折り・丁合・帯封等。さらにおしゃべりばかりで場を盛り上げる人も含め。それぞれがそれぞれにできる事を出し合い組み合わせ出来上がるたこの木通信。

そう言えるのは余裕があつての事。余裕を失うとどこか効率重視になり、手を動かさず口だけ動かす人にイラ着く私の余裕のなさに気づかされます。

という事で、毎月の発行作業を手伝って頂ける方を切に求めています。

毎月でなくても参加できるときに参加するというのもあり。ほんの少しの時間だけでも大丈夫。ワイワイおしゃべりしながら余裕をもって作業が進められるよう、ぜひお手伝いください！！

たこの木通信発行作業

毎月第3木曜日。10時～17時(作業終了時まで)

場所:多摩市関戸公民館又は多摩市民活動支援センター
(いずれも聖蹟桜ヶ丘駅近ヴィータ7階/8階)

※月々の作業場所の詳細はインフォメーションにて

も く じ

・表紙	1
・2025 年の初めに	2
・18 年分の答えあわせ	3
・じゃすみん通信 ～第 89 回 「存在している」こと の巻～	5
・行ったり来たりして考えていることなど 12	6
・社会に向けて その 10	8
・#shienin やまんば	9
・荒井聡子	10
・「青年時代 3」68	12
・世界の片隅で支援をつぶやく 118 ～凸凹ジグザグの道～	13
・たこの木インフォメーション	14
・『食べ物から学ぶ現代社会私たちが動かす・・・』『ほんの紹介」83 回)	16
・たこの木日記『年末年始。9 連休と言う非日常	17
・死なないための家 1 DIY 店名反転住宅イン所沢	18
・あしたや共働企画のページ	20
・フィットする支援をめざす会	22
・たこの木通信発行作業大ピンチ！！	23
・もくじ・編集後記	24
ねじり草 第 190 号	
・すいいち日記	2
・最近のすいいち企画 望年会にお餅つき	4

編集後記

- ・重度訪問介護の対象拡大を巡る諸課題もさることながら、それ以上に
居宅介護事業は壊滅的状况が拡大している。泊り介助がなく朝夕と休日に
居宅介護を使い自立生活をしている重度軽度の知的当事者たちは、単価の
低い家事援助が専ら。しかし、本人の想いに則し支援を担おうとすれば、様々な事柄を思
考し取り組まなければならない。しかし、単価が低く担いきれない事業所の事情もわか
らなくはない。さて、どうしたものか？
- ・9 連休を喜ぶ人たちがどれほどいたのだろうか？年明けのあいさつとともに「年末年始
の休みは取れた？」と聞けば、普段と変わらぬ人たちが多。公共交通機関も年末年始は
関係ない。そこでも人手不足が深刻。それに加え時間単位で給付される介助事業は、非常
に厳しい状況となっている。
- ・年賀状をお送りいただいた方々や明け
おめメールを送ってくれた当事者の
皆さんに感謝。2025 年は、皆さんにと
ってどんな年になるやら。
- ・とにかくにも地域にしがみつきながら
誰も排除されることなく暮らし続ける年
でありたいと願います。

発行人:障害者団体定期刊行物協会
〒157-0072 世田谷区祖師谷 3-1-17-102
編集人:たこの木クラブ
〒206-0025 多摩市永山 1-1-4 ルミエール 103
☎/☐ 042-389-1378
定 価:100 円